

## 平成 28 年度 定年退職教員送別懇談会

2017 年（平成 29）3 月 13 日（月）

東工大蔵前会館 くらまえホール



2017 年 3 月 13 日（月）に“くらまえホール”で定年退職教員送別懇談会が開かれ、懇談に先立ち、学長の挨拶、記念品贈呈、定年退職教員の挨拶がありました。司会は、前川眞一 送別懇談会 発起人が務めました。退職予定の 26 名のうち、15 名の先生方にご出席いただき、お一人約 3 分で思いを語っていただきました。概要を以下に記します。

文責：博物館 資史料館部門 広瀬茂久  
写真：総務部 総務課 & 広報・社会連携課



### 三島良直 学長

次の新たなご活躍のスタートでもありますので、「ご卒業おめでとうございます」と申し上げた方がいいかも知れません。こうして皆様のお顔を拝見しますと、いつかどこかで一緒に苦労し、いろいろと助けていただいたことを思い出します。感謝の念に堪えません。先生方には、1990 年代後半の大学院重点化、2004 年の国立大学法人化という激動を乗り越えていただき、その後の本学独自の改革にもご協力いただいたお陰で、昨年からは新しい教育システムが動き出しました。幸い昨年のノーベル賞にも後押しされる形で、日本の東工大から世界の Tokyo Tech へと変革を遂げています。先生方のご尽力に感謝するとともに、今後も変わらぬご支援を賜りたく、お願いいたします。



黒川 信重（理学院）

1970年に入学し、ほぼ東工大一筋でした（途中本郷にある大学に3年間勤務）。専門は数学ですので、ほとんどお金を使わず、紙と鉛筆と部屋を使わせてもらいました。私には時間が一番大切なのですが、評議員を務めたときは時間の工面に苦労しました。高校の時に月刊誌『大学への数学』で出会った150年間未解決の超難問「リーマン予想」を解くため（だけ）に今日まで生きてきて、定年直前に解法を示すことができたと思っているのですが、世の中が大騒ぎになっていないところを見ますと、誰も私が解いたことに気づいていない？！



村山 光孝（理学院）

30歳の頃に大阪から本学に着任しました。当初は長くいるつもりはなかったのですが、いつの間にか35年間もお世話になり、有り難うございました。私も数学ですので、黒川先生と同様にお金を使わずやってまいりました。大学は激動期で、これからますます大変になるかと思います。そんな中、この辺でやめられるのは幸せなのかもという気がしないでもありません。



赤木 泰文（工学院）

電気電子工学が専門で修士の時は川上正光先生、博士の時は齋藤進六先生に世話になりましたが、両先生ともに長岡技術科学大学の創設に関わられた関係もあって、1979年に博士課程を終えるとすぐに長岡技科大に着任しました。そこで12年したところで、郷里の岡山大学にPower Electronicsの教授として迎えられ、9年後の2000年1月1日付で東工大に戻ってきました。恩師と同じ部屋に入ることになったので緊張したのを覚えています。17年3ヶ月（学生時代の9年間を除く）の東工大生活でしたが、こうして元気で定年を迎えることができたことを幸せに思います。先輩の先生方が定年に際し、「これからは科研費の申請書から解放されると思うと少しホッとするとところと、ちょっと寂しいところもある」と言っておられた気持ちがよく分かります。何らかの形で今後も東工大に貢献したいと願っています。



岩本 光正（工学院）

修士過程 修了後1年間企業で働きましたが、それ以外は学部入学以来（約45年間）東工大で過ごしました。建物も南3号館（旧中棟）でずっと同じでした。専門は絶縁材料でしたが、世の中の激しい動きに合わせて種々のチャレンジをし、有機分子と電気・電子工学を結ぶ有機エレクトロニクス分野を開拓することができました。研究テーマのお陰で専門分野の異なる多くの先生方とお付き合いできたことに感謝しています。外国からの研究者の往来が絶えなかったのも幸せでした。そのような国際交流の延長として、中国の清華大学との大学院合同プログラムの世話人を引き受けることになり、研究時間が無くなるのではないかと心配しましたが、予想外に研究者間のディスカッションの時間が増え、プラスの面も多々ありました。新分野に舵を切ったところは異端児に見えたに違いありませんが、それでも温かく見守るという雰囲気の本学にあったからこそ成果が出せたのだと感謝しています。



堀岡 一彦（工学院）

先ほどの村山先生（数学）とは高校の同級生です。私も大学院を終えるまでずっと大阪にいましたが、1979年5月に本学の総合理工学研究科エネルギー科学専攻に採用してもらいました。新しい専攻でしたので、最初は石川台の旧精研に間借りし、半年後にすずかけ台に引っ越し、新しい建物で新しいことをやることになりモチベーションが上がりました。ただ何もなくて、時間だけが無限にあるような気がしていました。それから37年間経過したわけですが、振り返ってみるとアッという間でしたので、時間の大切さを痛感しています。1975年に設置された総理工もすでに40周年を迎え、昨年度の改組で私は工学院所属となりましたが、理学と工学が刺激し合う教育研究組織というのは活気がみなぎっています。今はいよいよと感ずります。今は過渡期ですが、いずれ、改組が大きな成果に結びつくことを期待しつつ、優秀な先生方と能力ある大学院生に囲まれて、私が教えたよりは遥かに多くのことを学ばせていただいたことに感謝します。



坂井 悦郎（物質理工学院）

大学院から東工大に世話になっています。博士修了後、3年ほど助手をし、民間企業の研究所に出ていましたが、1994年に戻ってきました。バブル経済の頃で企業には勢いがありましたので、何で今更そんなところ（大学）に行くのだと言われたものです。嫁も「エッ！」となりまして、「大学はブラック企業で勤務時間管理がなくなるのではないかと心配されましたが、幸い楽しみながらいろいろな仕事をするのができ、それらを通して社会貢献もできたのではないかと思います。優秀な学生さんがいて、いい大学だなと感じています。東工大のますますの発展をお祈りします。



大谷 弘之（生命理工学院）

生命理工学部ができる2年前（1988）に生体分子工学科ができ、私はそこから東工大にお世話になりました。その前は浜松ホトニクス(株)にいましたので、これまで一貫して光（femto 秒 =  $10^{-15}$  秒，pico 秒 =  $10^{-12}$  秒オーダーの光反応）を扱ってきました。お金はあまり持っていないのですが、実験装置はいっぱい持っていて研究には困りませんでした。今になって如何にそれらを廃棄するかで悩んでいます。研究以外のことで印象に残っているのは、入試の門番です。雪の中での門番の合間に、炭火で暖を取り雑談をしているうちに形成された教員の絆は貴重でした。最後に優秀な学生と一緒に充実した時間を過ごせたことに感謝します。みんな頭だけでなく気持ちの面でもいいものを持ち合わせていました。そういう学生と朝早く顔を合わせると「よし今日も！」とやる気がわいてきたものです。



田辺 孝二（環境・社会理工学院）

私は多くの先生方とは違い、東工大は12年間です。その前は行政官として通産省・経済産業省でイノベーション政策等に28年間従事しました。その間に本学の社会人博士学生として4年3ヶ月勉強させてもらい2003年12月に博士号を取得しました（経産省は2003年7月に退職）。そんな関係で、2005年にスタートしたイノベーションマネジメント研究科（IM）に迎えられ、社会人教育を経験したユニークな教員として社会人教育に関わることになりました。IMは田町を本拠地としていますが、土曜日や夜間に授業を行うということで「ある種の異端児」でした。この点では学長や理事・副学長の先生方には面倒をかけたと思いますが、ご理解とご支援いただいたことに感謝しています。社会人教育はなかなか難しいのですが、世界的には、エグゼクティブ教育やブルーマネジメント教育などを手掛ける社会人教育は大学院の重要な役割になっていますので、本学でも盛り上げて行ってほしいと願っています。



宮本文人（環境・社会理工学院）

専門は建築ですが、私は少し変わっていきまして、初めに経済学を勉強し卒業と同時にこちらの大学に入り直しましたので、43年間本学で過ごさせていただきました。いい学生・教員・環境の中で教育研究ができたこと感謝しています。いろいろな経験をさせていただきましたが、二つだけ取り上げますと、一つは私の専門である教育施設に関する研究ですが、二十数年間にわたって OECD の教育施設委員会に日本代表として参加し、多くの国々の方々と親しいお付き合いさせていただく中で、普通では得られないような情報も提供してもらい研究に生かすことができました。もう一つは、ある時期から大学の管理運営の仕事にも関わるようになり多くの先生方と知り合いになれたのは貴重な経験だったと思います。特に附属高校の校長職は良い勉強になりました。この経験から、この5月には OECD で東工大の附属高校の（意義等について）話をするようになっていきます。欧米でもモデルケースとして興味を持ってもらえるのではないかと期待しています。



桑子敏雄（リベラルアーツ研究教育院）

平成元年（1989）に工学部の助教授で哲学担当として着任しました。当時の人文社会群が工学部にありましたので、工学部の哲学だったわけですが、私はこの立ち位置がとても気に入ってました。教授会に出て文学部とはこんなにも違うのかと驚きました（議論はするけど決まらない文学部教授会と決断の速い工学部教授会！）。最初の頃は2コマの講義のみでしたので天国のように感じました。そのうちに大学院重点化等の改革が始まり、社会理工学研究科を作ることになったときは、名前を付けるところから大変で、文科省との交渉役や概算要求書の作文係なども務めました。社会理工ができたおかげで、大学院生が取れるようになり、14名の博士を出しました。そのうちの8名は大学教員をしています。彼らが先週の土曜日（2017.3.11）に「空間と価値シンポジウム」を開催してくれ、「善について」と題して基調講演しました。研究者・国交省・環境省・地域の方々など200名を超える方々が来てくださって会場（デジタルホール）がいっぱいになったのは感無量でした。定年後は塾をやってほしいという要望もありましたので、社会理工・価値システムの理念を実現するような塾をやってみたいと思っています。



井頭 政之（科学技術創成研究院）

類制度が始まった年（1970）に1類に入学し、応用物理学科を経て、卒研以来ずっと原子炉研で過ごしました。東工大一筋というのは今では珍しい範疇かも知れません。専門は原子力研究開発や中性子捕獲反応です。二つお話しします。一つは、退学届けの出し忘れで助手になるのが1ヵ月遅れた話です。博士課程の2年を終えたところで助手にしてもらえることになり手続きを進めたのですが、退学届けを出し忘れたために5月着任になってしまいました。ペレトロン加速器の立ち上げとそれを利用した研究を行ってきました。その装置は今も北実験棟4で世界最高レベルの性能を誇っています。もう一つは、最後の5年間、先輩の命令で引き受けた陸上部の監督についてです。箱根駅伝などは東工大には全く関係ないと思っていたのですが、たまたま速い学生（松井将器）がいて、昨年と一昨年、学生連合チームのメンバーとして出場しました。学長をはじめとする100人規模の応援を3か所でできたのは感激でした。次の年は大岡山商店街にもチラシを配りさらに盛り上がりました。これからも応援して頂ければ幸いです。47年間お世話になり有難うございました。



小田 俊理（科学技術創成研究院）

私も東工大一筋で、学生時代9年間、教員として38年間、合計47年となります。履歴書は大変シンプルで、東工大助手・助教授・教授の3行ですみます。しかし中身は変化に富んでいまして、理学部の物理学科卒業後は、総理工の物理情報工学専攻に進み、博士修了後の1979年に工学部の像情報工学研究施設の化学系の研究室に所属しました。1986年に工学部の電子物理工学科に呼ばれ、物理・化学・電気を渡り歩いたこととなります。丁度その頃できた超高速エレクトロニクス実験棟で電子ビーム露光装置を使ってナノテクノロジーの研究を始めました。最初の学生を受け入れたのが1987年4月ですが、それ以来30年、大まかには年に1人の博士、3人の修士、2人の学部卒を出してきました。私の研究室は外国人が比較的多く、留学生・ポストク・短期のYSEP・サマースクールを含めると76名、それに客員教授14名が滞在しました。ケンブリッジ大学とは1991年から26年間、毎年最低2週間にわたって派遣あるいは招聘という形で交流を続けてきています。全学交流協定では、ドイツのポールドルーデ研究所、インド工科大学デリー校、オランダのデルフト工科大学の窓口教員を務めました。2008年からは研究戦略室で大学全体のために研究費を獲得する仕事をはじめ、2013年に文科省のCenter of Innovationプログラムに応募し採択されました。課題名は「“以心伝心”ハピネス共創社会構築拠点」で、電気・情報・機械・人文系の40研究室に加え、16の学外機関が参加し、「定年65歳、80歳まで働く、100歳まで健康な生活を送る」そういう夢の社会を目指して頑張っているところです。このような充実した生活が送れたのは、教職員の皆様に助けていただいたお陰と感謝しています。



小田原 修（科学技術創成研究院）

学部生の時は金属でしたが、磨き（研磨操作）が嫌で、大学院は原子核専攻に移りました。ここでは先ほどの井頭先生と一緒にでした。その後、東北の工業技術院（東北工試）で「地熱工学」をやりました。仙台を訪問された先生方からは、「小田原、土臭いな」とよく言われました。匂いは気にならなかったのですが、大変だったのは私が苦手とする「金属の磨き」が待っていたことです。地熱では高級材料が使えないのでやむを得ないのですが、72個のうち4個磨いたところで、外部の業者に依頼して助けてもらいました。こうして弱点を克服するうまい手を身に着けることができました。その後もいろんな点で企業さんとの付き合いが多くなりましたが、「君たち、今日の1円が欲しいのか、明日の1億円が欲しいのか、どちらだ？」と聞くと、ほとんどの場合はこちらが望むように協力してくれました。最近は私の神通力が衰えたのか、「今日の1円をください」という企業が多く、世の中まづいのではないかと心配しています。1986年4月に総理工の電子化学専攻に出向し、微小重力燃焼合成がらみで宇宙環境利用に関する研究を始め、日本製の宇宙服にも取り組みました。先ほどの小田先生とも付き合いがありましたが、論文用の図の写真が大岡山の北口商店街にあった杉山写真館に頼むときは顧客カードが「小田研」「小田原研」の順になっていましたので、いつも「伝票は、小田研ね」と冗談を言っていました。

少し話が長くなりそうですが、本日一番言いたかったことを話します。私ども夫婦はどちらも末っ子です。子供が生まれた時、両親から「あなた達は末っ子だから、長男長女の気持ちは分からないだろう。心してちゃんと育てなさいよ！（甘やかすな）」といわれました。それから30数年、幸いにして子供は無事育ち、私は今では孫に嫌われるおじいちゃんになっています。大学も改革で新しい仕組みを生み出しました。誰も育てた経験がありません。30年たった時に立派に育つたと喜べるようにしていただきたいと思います。私自身は、金属、原子核、地熱、宇宙と進んできましたが、これからは「海」をやるつもりで準備を始めています。



佐々木 聡（科学技術創成研究院）

26年前（1991）に筑波の高エネルギー物理学研究所から移ってきました。高エネ研で助手をしていた時は、稼働し始めたフォトンファクトリーを使いいろいろな大学の先生や院生がやってきて、ワイワイと賑やかにデーターをとっているのを羨ましく見ていました。東工大に呼んでもらった先は当時の工業材料研究所でしたが、協力講座として総理工の材料科学専攻に入っていましたので大学院生と一緒に研究することができ大変良かったと思っています。共同利用施設となってからは外から受け入れるだけでなく、中からも外の施設を利用しに行くことができましたので、1週間程度の短期集中型で学生ともども頑張り研究の壁を乗り越えてきました。残った学生は、留守にしがちだった私に理解を示してくれ、感謝しています。「余裕を持とう」が口癖だったのですが、実際には私自身は余裕のない毎日だったと思います。これからは、余裕が出てくるので、それをどう処理していくか考えています。



長橋 宏（科学技術創成研究院）

1975年に電気工学科を卒業した後、秋口に第一陣として、すずかけ台キャンパスに移り博士課程までを終えました。当時のすずかけ台キャンパスは（長津田キャンパスと呼ばれていましたが）、雨が降れば川が流れるような状況で非常に大変でした。周りには店もなく、食堂もなく、よくあれで5年間も過ごせたなど懐かしく思い出されます。その後、山形大学で助手・助教授まで勤め、1990年に再びすずかけ台に戻ってきました。専門は画像処理でパターン認識・コンピュータグラフィックス・3次元形状モデリング等いろんなことをやってきたなという感じですが。思い出話となると、先ほど井頭先生から紹介のあった陸上部となります。実は私は陸上部の隠れOBです。そんな縁で、昨年と一昨年の箱根駅伝では三島学長らと一緒に東工大ののぼりを持って走りながら松井選手の応援をしました。ほかにも思い出はいっぱいあるのですが、時間ですのでこれぐらいにしておきます。長い間お世話になり有り難うございました。